

台風ナゾ

洞爺丸遭難

・微妙な進路の違いで大災害・

もし伊勢湾台風のコスがもう少し東を通っていたら、もし満潮の時刻とずれていれば・・・もし・・・ならば・・・の悪条件が幾重にも重なって、一九五九年九月の伊勢湾台風は過去百年で最悪の高潮被害をもたらした。台風からみればほんの僅かな進路やタイミングの違いが大災害を招くかどうかの分かれ道となる。

伊勢湾台風の五年前の一九五四年、魔の九月二十六日の夜、台風一五号の暴風雨と激浪に巻き込まれて、洞爺丸を含め五隻の青函連絡船が千四百三十人とともに函館湾で沈んだ。のちに洞爺丸台風と呼ばれたこの台風には、もし僅かでもずれていれば』という思いに係する悲劇は起こらなかったという三つの気象のナゾが残されていた。

偏西風に乗って時速百^キの韋駄天走りに日本海を北上した台風が、函館の北西海上で突如として速度を落した『ナゾの急減速』。台風にとって冷たい日本海の上を走りなが

らなぜか発達し続けた『ナゾの再発達』。そして嵐のなかのつかの間の静寂と雲の切れ間からの一筋の陽光を見せた『鴛りの晴れ間』のナゾ。三番目のナゾは、幻の台風の目の通過を錯覚をもたらした嵐の中での出航の決断の一つとなったといわれる。

函館湾の北西海上での再発達し急減速した結果、湾の周辺一帯は最も危険とされる『台風南東側』に入り、南南西の猛烈な風雨と波浪とに長時間さらされた。実は天然の良港である函館湾は津軽半島の北端の竜飛崎と函館を結ぶ一〇五度の方向に唯一最大の弱点を抱えていた。この線上の狭い範囲のみ、日本海から海峡を越えて吹く風と波浪を遮るものがない。この弱点を未知なるナゾによって巧妙に突かれた。

海峡を越えて侵入してきた高い波浪に四十^ミを超す南南西の猛烈な風が追い撃ちをかけ続け、激浪となつて五隻の連絡船をこの線上に並ぶように沈めた。もし嵐が韋駄天走りに去ったら、もし南南西風でなければ、一つでもナゾが欠ければ悲劇は起こらなかった。

台風が発達した温帯低気圧に变身する過程で起こる現象』として三つ気象m九位つづ解きがされたのは筆者が解き明かしたのは二十数年後であった。いまや気象情報の精度は上がりこのような災害は一度と惨事は繰り返すことはない。

(一九五九年九月三〇日)